
幻燐の姫将g.....いいえ、槍兵です。

waster

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幻燐の姫将ご……いいえ、槍兵です。

【Zコード】

N5768Q

【作者名】

waster

【あらすじ】

俺、死にました。

そしてテンプレ通りに能力をもつて転生した先は……

初投稿です。そして執筆自体はじめてです。すぐ駄文となりますが生暖かい目で見守って下さい。

プロローグ（前書き）

初投稿です。

生暖かい田で見守つて下さい。

プロローグ

え、つと、死にました。そしてただいま白い空間に居ます。
え、いきなり何かって？

クソ、ボーカルのキャンプなんて来なければよかつた。

そういえば、俺の名前を言つていなかつたな。

俺の名前は、柴本将人（シバモトマサト）。16歳のピチピチの高校二年生だ！－ちなみに成績は、最下位だ！－え？威張ることじゃない？

ゴホン、しかし俺にはまだやるべき事があつたんだ。主にエロゲとか、エロゲとか、エロゲとか、エロゲとか、あとエロゲ。

やべえ、Hロゲしかねこ（<ーー>）

アラビア語入門

死んだから俺の部屋が家宅捜査される。やめて、俺の宝（口口ゲ）をみないで～！！

「あの〜、もしもし?」

「んあ?」

俺が床で悶えていると、誰かが話しかけてきた。

「え〜と、アンタ誰?」

俺が声の方を向くと、幼女がいた。

「私は、神です。」

ふ〜ん… 神… 紙… 髪… 神?

イヤイヤ、無いだろ。こんな幼女が神様だなんて。

俺の聞き間違いだ。 神… k a m i … k a i … カイ…!

分かつた、この子の名前でカイっていうんだ。

「え〜と、カイちゃん?此処はど〜?」

「カイちゃん?私の名前は天照大神ですよ?」

へ?天照大神つて神様じゃん。しかも、世界初めての引きこもり。
世界初の一〜ト!まさしく、一〜ト神!!

「それで、その一〜ト神が何の用ですか?」

「え〜と、言いにくいのですがアナタが死んだのは私の責任です。」

あれ? チート神についてはスルー?

「どうしてですか?」

「アナタはあの時、車にひかれて植物人間になるはずでしたが、

植物人間って、死ぬよりひどいじゃん!!

「人の人生が書いてある紙にインクをこぼしてしまい、アナタは死んでしまいました。スマセンでした。」

「これつてもしかして…

「お詫びとして、アナタには転生してもらいます。」

キター＼(^o^)／

「そして転生してもらいつ時に、特典として、能力を与えます。」

テンプレだな。

でもどうしようか? 普通だつたら、チート能力もらつてオレーハEEとなるが、最強すぎるのもな。

よし決めた!!

「それじゃあ、Fat eのランサーの身体能力と槍の技量とアサシンの刀の技量をください。」

「これぐらいだつたら最強とは言えないだろ?」

「わかりました。あと、ついでに顔をランサーにしておきます。」

お、ラッキー。俺の顔ブサイクとは言えずとも、イケメンではないしな。

「あつがとうござります。」

「では、転生先におくつます。第一の人生楽しんでくださいね。」

一ート神（結局何も反応無かつたなあー）がそつぱつと足下に黒い穴ができて浮遊感が俺を襲つた。って、

「ギャー~~~~~

俺は絶叫マシーンが大の苦手なのだ。

（せういえば、ビート転生するか聞いてねえな。）

そう思いながら、俺は意識を手放した。

プロローグ（後書き）

間違いなど指摘がありましたら容赦なく言ってください。
感想おまちしております。

一話

「オギヤアアアアアア（知らない天井だ……）！」

俺、産まれました。

え？ なんでネタに走つただつて？

転生したから、言つてみたかっただけだ！！

ひとまず現状把握。まず、転生した先は中世ヨーロッパのような世界だ。次に、家族は母には会つてるが、父とは会つていない。だが、死んではいないようだ。兄弟姉妹はいないようだ。家はそこまで貧しくないようだ。

そして、最後に自分について。名前はまだ無い。有るかもしないが知らない。顔はランサーにしてくれると言つていたはずだが、人間以外にするとは言つていなかつたはず……。

母は普通の人間だ。しかし、なぜ俺は耳が尖っている？

あれが、半エルフとか言つやつか？ しかし、それ以前に俺はエルフか？

とりあえず思いついたのがエルフだが、ライカンスロープ（狼男）、ヴァンパイアなど、いろいろなものがいる。それこそアニメやゲームなどに耳が尖っているキャラはいくらでもいるので数えだしたらきりがない。

まい! ひとまず寝るか。

* * * * *

コンニチハ～～～。

父とはまだ会っていない。あえない理由があるのだろうか？

まあ、今は寝る。オヤスミ~~~。

* * * * *

とうとう母の名前を知りました。ついでに、ファミリーネームも。

母の名前は、アリア・ファミリオンス・マーシルン。当然ファミリー
ネームは、マーシルン。

〔幻燐の姫将軍〕

その主人公が、リウイ・マーシルンという半魔人のゲームだ。

アリア・フェミリンス・マーシルンはその母親だ。

ということは、俺は半魔人なのか！！しかも、姫神フェミリンスの血も受け継いでいる！！

しかし、これからどうするべきだらうか？俺というイレギュラーがいる中でリウイは産まれてくるのだらうか？それとも、俺自身がリウイのかわりなのだろうか？

俺がリウイの立場とか嫌だな。

よし。まずは生き残ろうか。半魔人の俺は、必ず魔神病を発病するから村の人々から恐れられるだらう。リウイは魔神病を防ぐ魔法石を壊してしまつたが、俺はそんなへマはしない。

* * * * *

あれから3年。当然俺は3歳。

何事も問題なく、平和な暮らしをおくつています。

魔法石が有るから村の人々との関係は良好だ。

俺は、産まれて1年ちょいで言葉を話始めたから、村の人からよ

く讃められる。

母も、「さすが、あの人と私の子ね」と誇っているようだ。

「ママア～、だあ～いすき」と言つたら、鼻血を勢いよく出して悶えていた。

大丈夫か、この親？

父とはまだ会っていない。母は何回か俺を隣の家に預けて、会つている様だが。

まあ、魔神で王だしな。忙しいんだろう

あと、俺に弟か妹ができました！！

たぶんリウイなのだろう。

しかし、俺というイレギュラーでどうなるのか分からぬ。

もしかしたら妹かもしれない。どちらでも嬉しいがな。

そういうえば、俺の身体能力スゲーよ。

3歳だから身体はちゃんとできないからかなんとか、ギリギリだが、バクテンできたぞ！－

3歳でバクテンって、ランサーってスゲーな。

あと、俺の目つきが悪いと言われます。

村中の子供たちに泣かれました。」

とつあえず、今は弟か妹が産まれてくるのを待ちますか。

でも、魔法石はどうすんの？ 一個しかないけど？

まあ、いいや。とつあえず、兵士さんの所にいつて槍を貰ってもらひよひに交渉しなきゃ

ランサーの技量を貰つたから、試してみないと。

そつこえは、アサシンの技量は意味がないかもな。

まあ、貰つていて損はないしな。日本刀が欲しいな。西洋剣でもできるかなあ？ 燕返し……

一話（後書き）

感想をお待ちしております。

一 話（前書き）

今回は、私の主觀が混じつております。
あと、原作では、リウイは王都に住んでいましたが、この小説では
村に住んでいます。

4歳になつてから、はや一ヶ月。とうとうコウイが産まれました。

やはり男の子で、名前は俺がつけました。

名前が違うヒメンドいからな。

魔法石はまだ俺が持つています。赤ん坊の頃は発病しないらしいし、したとしてもなんとか誤魔化せるかららしいです。

そして、槍ですが貸してもらひのあきらめました。

え? 何でかつて?

危ないからと言つて貸してくれませんでした。しかし、俺はあきらめなかつた。あの事件までは……

* * * * *

2週間前・兵士駐在所にて

「槍を貸して下さー。」

俺は頭を下げていた。

「ダメだ。君には早すぎる。危険だ! !

「大丈夫です。模擬戦用でもいいので貸して下さい……」

「ダメだ……」

チツ。こんなにも頭下げてんだろうが。貸してくれてもいいじゃないか。それなら、

「それじゃあ、模擬戦をして下さい……それで、危険じゃないと判断して下さい。もし、危険だと思つたら諦めます。」

（う～む。ここで危険だと思わせれば、この子は諦めるだろう。それに、寸止めでもすれば怪我の心配なく怖がせることができるのでう。よし、）

「いいだろ？。しかし危険だと判断したら諦めりよ。」

「はい。（計画通り……）」

模擬戦場

「お~、隊長怪我させんなよ~」

「こいつから隊長は子どもをいじめるよつになつたんだ?」

兵士達が野次馬として大量にいた。仕事しろよ。

「今日は木の棒を槍に模した物を使つ。準備はいいな？」

「はい……」

「じゃあ、さじめつ……」

俺は始まつたと同時に、

「お前の心臓もうい受けろ……刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ボルグ」

俺はやうやくと、槍を投げた。

「へ？（。 。 ）」

ビヨンツ……

槍はありえないスピード（約100km/h）で飛んでいった。

いやいや、確かに本気で投げたよ。でもありえないだろ……（ちなみに、ランサーが投げるとマッハ2ぐらいでるらしい。）

槍は隊長の左胸に飛んでいた。

「ふーおつ……」

バタリツ……

たいちよつをたおした!!けいけんちゅをもひつた!!テレテツテ
エー!!レベルがあがつた。

いやいや。ふざかひる場合ぢやない。

シ~~~~ン

ヤバい。この空気耐えられない。といつか誰か隊長を心配しinよ。

「え~と、あの~その~なんて言つか.....隊長が言つてたと
おり、槍つて危険ですね。諦めます。はははは.....は.....はは.....
..(へーへー)」

((おまえが危険だろつ))

その時、みんなの心が合わせつた瞬間だつた。

* *

回想終了。

あの後は大変だつた。兵士の皆さんは呆けているから俺が隊長を看病した後、ひたすら謝つたなあ。うん。みんな、武器は危険だよ。
扱いには注意しあうね

さて、筋トレでもしますか。

え? 村の子どもと遊ばないのかつて? いまだに俺の顔をみると泣く
んだよ。」

それに、俺にはリウイというかわいい弟がいるからね。寂しくなんか...寂しくなんか...寂しくなんかないんだからね! -!

あれ? 口調がシンデレになつてしまつた。

つておこなこの母親よ。なぜ「ツンデレ萌え～」などとつぶやいている?

母よ。アナタも転生者か?

* * * * *

あれから5年。俺は9歳、リウイは5歳になった。

俺は、リウイが3歳の誕生日に魔法石を譲った。魔神病は気合いで何とかした。ビリにもならない時は家に引きこもって何とかじまかした。

しかし、リウイは魔法石を壊してしまい、魔神病が村の人々に見られてしまった。

それからといふものはひどかった。村中から差別され、恐怖されて、みんなが俺たち家族をきちんと見てくれる人はいなくなつた。

仲のよかつた隣の家との関係も最悪なものになってしまった。

一番ショックを受けたのはリウイだらう。

今まで仲良くなってきた子ども達が、リウイを避けるか、イジメられるようになった。

子ども達の親が、イジメを止めたとしてもそれはリウイを恐れてい るからだ。

リウイはこつも三のまどりで泣いている。

「リウイ、またここにいたのか。わあ、帰るわ。」

「ジーク兄ちゃん……」

リウイは泣いていて、田のまわりは赤くなっていた。

「家で、母さんがじ飯をつべつて待つてこら。ほひ、泣くなつて。

「

「ねえ……ジーク兄ちゃん。」

リウイは蚊の鳴く声で俺を呼んだ。

「なんだ?」

「じつして僕たちは、イジメられるのかな?」

「…………」

「僕が生まれてこなければよかつたのかな?そうすれば、お母さんもジーク兄ちゃんもイジメられなかつたのに。僕が産まれてこなければ……」

「リウイ、産まれてこなければなんて言つた。俺と母さんもお前が産まれてくれて幸せだ。だから、絶対にそんなこと言つない。」

「でも……」

「いいか、リウイ。この世界で産まれてきてはいけない生命なんてないんだ。どんなにその存在が人に迷惑をかけても、その存在には意味があるんだ。だからそんなこと言つたな。お前にはまだ難しいかな?でもな、さつきも言つたが俺と母さんはお前が産まれてきてくれて幸せだ。」

「…………うん」

「よし、家まで競争だ!!」

「え~、ジーク兄ちゃんは足速にじやん。」

「当たり前だ。お前より4年早く産まれたからな。」

「いや、そんなレベルじゃないよ。」

「よ~い、ドン!!」

「うわあ~、待つてよ~。」

そうして俺達は家に向かつて走り出した。
そしてその日の夜が運命の夜だった。

* * * * *

「お粗末様でしたー。」「うわあ~、うわあ~でしたー。」

「お粗末様でした。」

「ヤッパリ、お母さんの『」飯はおいしけ

「あつがと、リウイ。』

そんな会話をリウイと母さんがしていると、足音が聞こえた。

ドタドタ、ガチャガチャ。

音を聞く限り兵士の様だ。しかも重装備で、何十人もいるようだ。

「母さん……王都が動いた。』

「わい……お父さんのところへ行くわ。すぐ準備して。』

「父さんの所? 分かった。』

「? ? ?』

リウイは分かつてなによつた。

「コウイ、今からお父さんのところへ行くわよ。』

「今からお父さんのところへ行くわよ。』

「ええ、わうよ。』

「母さん、早く……』

「わあ、コウイこくわよ。』

準備はできた。といつても持つて行くものは護身用の槍だけだが。
隠してあつた裏口から俺たちは森に入していく。後ろでは、家の中でドタバタと俺たちを探しているようだ。

そして俺たちは、父さん 魔神グラザのところへ向かった。

11話（後書き）

感想をお待ちしております。

三話（前書き）

戦闘描写って難しいですね。

「ハア、ハア、ハア、ハア、ハア」

俺たちは今、森の中を走っている。

その後、兵士たちはすぐに裏口を見つけて追いかけってきた。

俺はランサーの身体能力を持つてるので、五感が優れている。だから、聴覚でいろいろと分かつたりする。

「母さん、リウイ、大丈夫？」

俺は身体能力が高いから大丈夫だから問題ないが、母さんとリウイは体力がないのに、足場が悪い道を走っている。

「ええ、まだ大丈夫よ。」

「僕も大丈夫だよ。」

そう言っているが、二人ともキツそうだ。
だが、ここで立ち止まるわけにはいかない。

どうする?このままでは追いつかれてしまう。

相手は訓練している。重装備でもすぐに追いついてくるだろう。

ましてや、先回りをされたらもうと面倒だ。

父さんのところまでには追いつかれるだらう。

今も、考へてる間にしつかりと差が縮まつてきている。

いつなつたら仕方がない。

「母さん。俺が囮になる。」

「ダメよ……そんなの絶対ダメ。」

「だけビ、このままじゃすぐに追いつかれる。」

「それなら私が囮になるわ。」

「それだと、母さんが捕まつたあとですでに俺たちも捕まつてしまふ。俺なら、この槍で足止めすることができる。」

「それでもダメよ……ジークが危険じゃない。」

「大丈夫。俺は強い。母さんも知ってるだろ。兵士の隊長を俺は一撃で倒したんだ。だから、大丈夫だつて。」

「…………じゃあこれだけ約束して。必ず戻つてくるって。」

「ああ、約束する」

「リウイ。俺は今から後ろから追つてくるやつを倒していく。だから、その間母さんを守るんだぞ。」

「ジーク兄ちゃん、帰ってきてね？」

「ああ、約束だ。」

そう言つと俺は身を翻して、走り出した。

* *

ヤベエ、死亡フラグ立てちゃつた(^ _ ^ ;)

でも、母さんとリウイの為にお兄ちゃんガンバるぞお～。

ランサーの並外れた五感で兵士を確認する。

「えへと、兵士が20人。そのうち、7人が弓兵か……」

パンッ!!

「よし、いっちょやりますか。」

そつ言つて頬を叩いた。

敵は、20人、無謀だがランサーならできるだらう。

なら、俺にだつてできる筈。

敵との距離はすぐそこだ。

さてと、いつこう時はカツコつけるか。

「我が名は、ジーク・マーシルン!! 勝利を名に冠する者なり!! ござ、参るー!!」

そう言つと、俺は敵にむかつて走りだした。

* * * * *

(弓兵が厄介だな)

俺はそう思いながら、兵士たちの横を通り過ぎ、一人の弓兵にむかつていった。

(ま づ は 、 一 人 。)

そして、喉を一突きした後すぐに方向転換し、次の「兵へとむかつた。

(ランサーと同じといつても、矢よけの加護があるとはいえ、戦い中によければほど戦い慣れはしていない。だから、先につぶす。)

槍で切り払い、喉を切つて一人目、三人目を同時に殺す。

(次！)

俺は人殺しをしている。しかし、罪悪感は無い。

それどこのか、この戦いを楽しんでたえいる。

それが、魔神の血のせいなのか、ランサーのせいなのか、それとも元々俺自身に殺人願望があつたのかは分からぬ。

だが、俺には今やるべきことがある。

母さんとリウイの逃げる時間を稼がなければならぬ。

「うひあーー！」

弓兵を全員片づけた。

後は、13人ーー！

俺は、すばやく敵の懷にはいって鎧の隙間に刺してすばやく逃げる。

よし、次ーー！

俺は、次の兵士の懷にはいった。が、

「ガツーー！」

俺の隙をねらい、他の兵士が俺に攻撃してきた。

「くつーーー！」

すぐに攻撃範囲からである。

が、他の兵士が回り込む。

「つー！チイツ。」

そこからも離脱する。

しかし、そこにも敵は回り込んでいる。

「クソがあつ！…」

一瞬の隙に敵の喉を突く。

「おらあ！…」

次の兵士も懷にはいり胴にある鎧の隙を突く。

だが

「しまつた！…」

深く突きすぎた…！

人間の体は意外と丈夫で、あまり深く胴体部分を刺すと刃は抜けなくなることがある。

筋肉の収縮は思っているよりも強い。

「うがあつ！…」

そのできた隙に兵士が槍で突いてきた。

「へつ……」

俺は、槍から手を放しすぐに離れた。

ズキンッ！

「つぐつ

が、傷が深かつた様で倒れてしまった。

クソー！傷が深い。それに血も流しきった。
しかも目が霞んで見えにくくなつてきやがつた。

(もう、ダメか……)

そんな言葉が頭をよぎる。

残り十人。満身創痍の俺では相手にできない。

まあ、いいか。母さんとリウイの逃げる時間は十分稼げた。

(母さん、リウイ、ゴメンな。約束は守れそつにないわ。)

警戒してゐるのか、じわじわとゅうくり敵兵が近づいてくる。

死ぬのは一回目か……

。

イヤだ

いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！
いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！
いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！
いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！
いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！
いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！いやだ！！！

俺はまだ、死にたくない！！

『ならば呼べ、その名を。』

誰を？

『叫べ、自分の魂を。』

魂？

『掴め、その手に。』

何を？

『生み出せ、自分だけの武器を。』

俺だけの……武器？

『「」の信念のために……』

そいつか……お前が、俺の魂、俺の武器なのか……。

ならば呼ぼう。お前を……いや、ホントの俺自身を……！

「今こそ目覚めろー！ Lance of Eclipse (リанс オブ イクリプス)」

二話（後書き）

最後の槍を知ってる人いるかな？

某エロゲーにててくる魔王（主人公）が使つてる槍なんだけどね。
ゲーム本編には一度も名前が出てきてない。

感想おまちしております。

体の奥から力がわいてくる。

体の痛みも感じない。

俺の【魂】を持つていると、心が安らぐ。

【魂】は、禍々しく朱く染まつた一叉の槍だった。

Lance of Eclipse (ランス オブ イクリプス)
『失墜の槍』

それが俺の魂を具現化した【魂】、俺だけの武器だった。

いきなり俺の手に槍が現れて、敵兵は驚いているようだ。

だが、槍を持つただけと思い更に近づいてくる。

「Code・魔を統べる王の槍（ランス オブ イクリプス）」

そう呟くと、体を紫色の魔力が覆う。

（俺は、生きる。そうコウイと約束したんだ。）

そして、敵兵が槍で突いてきた瞬間、俺は動きだした。

ドスッ！！

敵兵が俺を刺した。

が、それは残像。俺は残像を二体創り出した。一体は敵を突き、一体は敵をなぎはらつ。

動きも、さつきとは比べ物にならない。

が、俺自身は今はキツイ。自分の体と残像二体を同時に動かしている為である。

そして、最後は敵の隊長だけになった。

「何だよコイツ。ガキのくせに強いじゃねえか。」

俺は、「魔を統べる王の槍（ランス オブ イクリプス）」を解除した。

「残念だつたな。相手が悪かった。お詫びとして、いいものを見せてやるわ。」

そう言つと、俺は槍を構えた。

「お前の心臓もらい受ける……。」

そう言つと俺は一気に、数十メートル後ろに飛んで下がり、駆け抜けた。

「突き穿つ死翔の槍！！
ガイ・ボルグ

そして、俺は槍を投げた。

ズドーンッ！－！

槍は纏つた魔力で地面を削りながら勢いよく飛んでいた。

ズドーンッ！－！

隊長にあつた瞬間、地面にクレーターを作った。

フランッ！－！

あ、やべ。

バタン！－！

俺は倒れてしまつた。

ああ、疲れた。でも約束を守らなくちゃ。

あれ？約束って何だつたけ？…とても大事な…こと……だった気が

……

そして、俺は意識を手放した。

* * * * *

? ? ? side

血のニオイ？

しかも、大量の。

こんな森の中で、なんだ？

ズドーンッ！

っ！！

『なんじゃ？ 今のは？』

何だ？ 爆発？ こっちだな。

俺が爆発のところに行くと子どもが倒れていた。

「おい、大丈夫か？」

子どもは、体中傷だらけで脇腹に大きな刺し傷があった。

『おい、お主これを見る。』

俺は、子供から視線をそらすとクレーターを見た。

『これは… スゴイのう。』

確かに。半径7メートルはあるだろ？

『この小僧がやったのかのう？』

「さあ、な。」

俺はそのままつと、子供を抱いて立ちあがつた。

『おいーーの主、その小僧をどうするつもりだ?』

『連れて行く。』

『何でじゃ?』

『知らん。だが、そうしなければならぬと思つた。』

『ハア~~~~。まあ、お主はよく分からんことをする。』

俺はその声を無視し、村へと歩きだした。

side end

アリア side

私たちは、あの人の所についた。

そこで、ジークが残つて時間を稼いでくれていることを告げるとすぐ探しに軍を出してくれた。

無事だといいけど……

軍が帰ってきた。

しかし、その中にジークはいなかつた。

報告では、兵士の死体は見つかったが、ジークは見つからなかつたらしい。後、その場には、半径7メートルのクレーターができていたという。

そして、ジークは死んだとされた。

（一九四二年）

私は信じられなかつた。

(ジークは生きている。どこかの村で傷を癒しているんだわ。)

私は必死にそう思つた。

「お母さん、ジーク兄ちゃんは？」

(そう、あの子はリウイと約束したじゃない。)

(あの子は、約束を破らないわ。)

「大丈夫よ。後、何日かしたら帰つてくるから。」

そういうつて私は、リウイを抱きしめた。

s i d e e n d

* *

「ビレだ、ビレ?」

俺が起きると、知らない部屋のベッドにいた。

(俺、何してたんだつけ)

俺は、眠る前に何をしていたか思いだそうとするが、

(あれ?俺ってなにしてたつけ?)

俺は何も思い出せない

それ以前に俺は誰だ?

思いだそうとするが、何も思い出せない。

「約束、まもらなきや。」

え？約束つて何だ？

何も、思い出せない！！

ガチャ

俺が悩んでいると、赤い髪の毛の人気が入ってきた。

(キレイだなあー)

俺はそんなことを思った。

「起きたか。体は大丈夫か？」

「あ、はい大丈夫です。」

「そうか、ならいい。」

そんな返事が返ってきた。

そこで、会話は途切れてしまった。

シーン…………

(うう、気まずい。)

そこで、その人が話しかけてきた

「セリカ。」

「え？」

「俺の名前だ。」

「名前？」

「さうだ、俺の名前はセリカだ。」

四話（後書き）

ハイシニアの口調が難しい。
感想おまちしております。

武器 技 用語（前書き）

最強にならなかったのに、最強になってしまったorz

武器 技 用語

武器 : Lance of Eclipse (ランス オブ イクリプス) 『失墜の槍』

ジークの魂が【魂】として具現化した物。朱く染まつた槍で、先が二つにわかれた二叉槍。

元ネタは、「ティンクル くるせいだーす」の主人公「咲良シン」が使う槍。

技

• Code : 刺し穿つ死棘の槍ゲイ・ボルグ

主にFateのゲイ・ボルグと同じ。相手の心臓に刺さるという因果をつくりだす反則技。

• Code : 突き穿つ死翔の槍ゲイ・ボルグ

主に、Fateのゲイ・ボルグと同じ。魔力をまとわせて投げることにより敵をなぎはらう、大勢の敵には効果抜群。

• Code : 燕返し

アサシンの技量によつて修得した燕返しの槍版。一度に一回の突きと、二回の斬をくりだす技。

• Code : 魔を統べる王の槍 (ランス オブ イクリプス)

魔力を体に纏うことにより、質量のある残像を作り出して攻撃する。イメージとしては、影分身。紫色の靄のような魔力を体中に纏う。創つたいくつもの残像を自分一人で動かすので、脳を酷使する。

・Code：闇を統べる天使の槍（ランス オブ イクリプス）

自分の身体能力を一倍、五感を最大まで強化し、魔術をうけつけなくする。しかし、二分が限界で、それ以上使うと体中の筋肉がズタズタに引き裂かれ、激しい頭痛が襲い、一週間は昏睡状態に陥る。

・Code：世界を還す救いと滅びの槍（リ・クリプス）

ジーク最強の技。槍の先にリ・クリエの光を集め、衝撃波として打ち出す。最大で使うと、世界が滅びる。ジークが使うことはほぼ無い。

世界が滅びると言つても、リセットされるだけで、また新しい歴史をきざんでいくことになる。

・舗有無欄

「カツキーン、ホームラン」と言いながら、槍に魔力を纏わせ、柄で叩いてかつ飛ばす荒技。ジーク唯一の非殺傷の技。

・魔術

ジークは三種類の魔術を使える。念動系魔術、電撃系魔術、地脈系魔術の三つ。

【魂】

自分自身の魂を具現化し、世界に物質として顕現した物。一度自分の魂に触れなければならぬので、転生者にしか具現化できない。【魂】を解放すると世界と同化する。

リ・クリエ

世界自身が歪んだとされる世界を破壊し救済しようとする現象。破壊された世界はリセットされて、一から始まる。転生者は歪みの一つとされる。

しかし、【魂】を解放した者は世界と同化するため歪みとは認識されなくなる。

武器 技 用語（後書き）

リ・クリHとか、もろにテインクル くるせいだーすですね。

つていうかテインクル くるせいだーすを知ってる人いるかな？去年にp.s.pで出たけど。

五話（前書き）

「武器 技 用語」に技を追加しました

「そこ…！」

そう言つて俺は、ワームを槍で突き刺した。

「これで、最後！！」

そして俺は、ワームの群れをたおした。

『坊やは強くなつたのう。』

「ああ。」

俺が振り返ると、一人の美人？な男性？がたつていた。

「いえいえ、セリカさんと比べたらまだですよ。」

『当たり前だのう。そんな簡単に強くなるのだつたら苦労はしないしのう。』

「確かにそうですね。」

ハイシエラ様がそう言つてきたので、肯定しておいた。

俺が、セリカさんと共に行動するようになつて、一年がたつた。

俺はいまだに記憶を取り戻していない。

あの後俺が倒れていたこと、周りの死体のこと、クレーターのことを質問されたが、俺は記憶喪失。何のことか分からなかつた。

だから、自分が記憶喪失だと云ふことを告げた。唯一覚えているのが誰かと約束をしたことなどを告げると、セリカさんは少し悲しそうな顔をした。

そして俺は記憶を取り戻すためにセリカさんの旅についていくことになつた。

そのとき分かつたことだが、普通は聞こえないハイショーラ様の心話が聞こえることが分かつた。

あと、余談だが、セリカさんが言つては俺は剣の使い方が変わっているらしい。

無意識で剣を振つていたので分からなかつたが、確かに振りにくらい。使う剣がいけないと言われて、新しい剣を買いに行つたら田をひく物があつた。

刀というもので、片刃の反つた剣で試しに振つてみたらしつくづきた。

それからも、俺はセリカさんと旅をしている。

この旅をしていて気づいたが、セリカさんは忘れやすく、どこか抜けていて、人と深い関わりを持つとしない。俺は特別らしい。

「これから、どうするんですか？」

俺は、隣を歩いていたやっこさんと聞いた。

「」わからか……。」「

《それなら、坊やをひらった所にこいつがなぜいるのかの?》

「ふむ、わうするか。」「

「なにも残つてないんぢやないですか?あれから一年ですよ。」

《向もなくても、近くの村はなくなるまい。》

「あ、なるほど。」「

「じゅあ、いくか。」「

やつ言ひつい、セリカわんせんを圧した。

「わあ~、待つてくださいよ~。」「

そういうながら、俺はセリカさんのあとを追つた。

* * * * *

「セリカさん。」「

「何だ?」「

「 」の状況、何ですか。」

《モテモテだの。》

あれから、森を歩いてるついで迷宮を発見した。

丁度、迷宮内に湖があり口も暮れそつたので此処で野宿しようとすることになったのだが、

「モテモテって、これはちょっと……」

俺たちは、水精の群れに囲まれていた。

中にはウンダーティーネやニア・マイがいる。

見たところ、軽く五十は超える。

《で、どうするのだ?》

「どうするも、倒せなければ逃げることもできません。」

「 」の数ですかー?」

《それならば、せつと終わらせて》

「 ああ。」

「 ちよ、マジックか? ああ、もうコンチクショーン! 」

「 ちよ、マジックか? ああ、もうコンチクショーン! 」

そつと聞いて俺も群れに突っ込んでいった。

* *

「ゼゼゼゼゼゼゼ」

《軟弱》のう。見ろ、セリカは平氣のようだが?》

「普通……は……疲れ……ますよ……」

マジで疲れた。つていうかセリカさん、何で平氣なんですか?ホントに入間か?

「疲れたのなら、早く休め。」

「…………は、はい。」

汗かいたな。そうだ!一度ここに湖があるから水浴びしよう。

久しぶりだな。こここの水は冷たくて気持ちよさそうだな。

こつこつして、夜はすぎていく。

* *

今日は、迷宮の近くにある村にきた。

迷宮を探索しようとしたが、広すぎたので断念。

そこで、予定どおり近くの村にきたのだ。

(俺は、このを知っている?)

俺はこの村の景色に見覚えがあった。

『どうじゃ? なにか思い出したか?』

「いいえ。ですが、この村は懐かしい感じがします。」

「そうか。なら、村人にも聞いてみればいいだろ?」

「…………うですね。」

その時、歩いていた村人が俺を見て言った。

「ジーク・マーシルン!」

俺はその名に覚えがあった。

(俺の……名前?)

もつところになると聞く。「うとすると」と、

「何で帰ってきた? 呪われた子め……。」

「え？」

その怒声に他の村人たちがやつてきた。

「そうだ……どうして帰ってきた？」

「半魔人め！俺たちを殺しにきたのか？」

「あの……ちょっと……」

「お前なんて消えてしまえ！――」

誰かが石を投げてきた。

それをキッカケに、村人たちは俺に向かって石を投げ始めた。

「くつ……」

俺は村人たちから逃げる為に走り出した。

そして、ある焼けた家を見つけた。

(この家を知っている。ちがう、この家に住んでいた?)

ズキンッ！――

「ウグッ！――

頭痛と共に記憶が頭に流れてくる。

自分が半魔人だといつ」と、母さん「」と、ロウイの「」と、そして
約束のこと。

「ああ、そうか。俺の名前はジークか。」

「大丈夫か?」

「セリカさん……」

セリカさんが、話しかけてきた。

「ええ、大丈夫です。あと、記憶を取り戻しました。」

「そうか。」

『なら、坊やの名前はなんなのだ?さつきの村人がいつていたが……』

「ああ、俺の名前はジーク・マーシルンだ。」

「……で、何があった?」

「……」

「つらいなら言わなくてもいいが?」

「いいえ、言います。知つておいてもらいたいので。」

そう言うと俺は話始めた。

「俺は、人間の母と、魔人の父の息子で半魔人です。他に弟が一人いました。」

「父とは離れて住んでいました。この村の村人たちとの関係は良好で、何不自由なく暮らしていました。」

「ある日、弟の魔神病を村人に見られてしまったのです。」

『魔神病、確かに半魔人が発病する病気だったのう。』

「はい。そして村中にある噂が流れ出したんです。魔神病にかかつたら、人を食べると。」

「あとは、村人たちに怖れられて、村から追い出されました。」

『ひどい話だのう。』

「ああ。」

『これから、どうするのだ?』

「前に言っていた約束。あれは、弟と交わしたもので、生きて帰るといつものです。」

「だから、母さんと弟を捜します。」

「そりが。」

「ええ、これからは一人で旅します。」

『寂しくなるのう。此奴と一人つきりだと、会話が続かん。』

「ハハハ、確かにそうですね。」

「前に戻るだけだろ？。」

『それでも、会話相手がほしいのじゃがのう。』

そつ言つて、ハイシエラ様はため息をついた。

「セリカさん、ハイシエラ様。今までありがとうございました。では、またいつか。」

「ああ。」

『うむ、またいつかだのう』

「そうだ、セリカさん。次に会つときまで、俺のこと覚えておいて下さいね。」

俺がそういうと、

「ああ、一応頑張りう。」

『一応なのか……』

そして俺たちは、分かれた。

せん、これからどうじよいつか?

なぜか、大国カルツ・シャ王国に行つた方がいいきがする。

なせだ？まあいい。行き先はカルツ・シャにするか。

何かがある 総対に

そして俺は、カルツ・シャ王国に足を向けてた。

カルツシャ王国についた。

今は夜だ

俺は半魔人だから、フードをかぶつて耳を隠してる。

逆に目立つてゐるが仕方がない。

(何かに呼ばれる?)

何かに呼ばれている感覚がする。なんか、いつ、同じ存在?のよひな、ひかれあうような感覚。

それが、城の中から三つ。一つは強くて、後二つは、弱いが。

「あの部屋か…………。」

その「ひ、弱い感覚の一いつがベランダつきの部屋からある。

「よつ、ほつ、てゐ、」

そつとつて俺は城壁をベランダまで登つさつた。ジャンプして。

「ふ～う、案外できるんだな三段階空中ジャンプ」

空中に、念動系魔術を使って、足場を作つただけだが。

ギイイイイイ

「誰ー?」

俺がベランダの窓をあけると、金髪の少女がいた。

「あんたか?俺を呼んだのは?」

「え?」

その少女は呆けてしまつた。

「あの、呼んだって?私は誰も呼んでませんよ。」

少女からは、あの感覚がする。

「ああ、呼んだって言つても口に出していつた訳じゃなくて、感覚

だから。」「

「えつと…といふでアナタは？」

「ああ、そうだったな。俺の名前はジーク。ジーク・マーシルンだ。

」

俺は、そう書いてワードをとつた。

「ツー…魔族？」

「ああ、半魔人だ。母親が人間だ。」

「半魔人!? 私をどうするつもりですか?」「ん? 別になにもしないぞ。」

「は?」

「じいて書うなら、会話相手になつてくれ。」

「会話相手?」

「そつ、最近は独りで旅してゐるしな。」

「冒険者なんですか?」

「いや、一年前に分かれた母と弟を探しにね。

「そつなんですか…」めんなさい。」

「セーラーさん。ヒーリングで君の名前は。」

「え?」

「だから、君の名前は?まだ聞いてないよ?」

「私の名前は、セーラー・テシュオスです。」

「そうか。セーラーか~。いい名前だねえ~。可愛い名前だね~。」

「可愛いって//」

「じゃあれ、セーラー。俺の話につきあつてよ。」

そして俺たちは、話はじめた。

* * * * * * * * * * * * * * * *

「クスクス。ジークさんの話ついでおもしろいですね。」

「そうかな?でも楽しんでもらえてうれしいよ。それに、セーラーの笑顔は可愛いから、いらっしゃりしてもありがたいし。」

「そんな、可愛いだなんて//」

「そう言つと、セーラーは顔を紅めてしまつた。」

なぜだ？

俺がそんなことを考えていると、

ゾクッ！！

(殺氣？あと、あの感覚？)

殺氣とセリーヌより強いあの感覚がこいつに迫ってきた。

バンッ！！

そして扉が強く開けられた。

と同時に連接剣が俺にむかって振り下ろされた。

「セリーヌ。無事か？」

「エクリア姉さまー？」

入ってきたのは、仮面をつけた女だった。

「危ないな～。連接剣だなんて軌道が見にくいから、はじくのも精一派なんだよ？」

「ふんっ、それをはじいたクセになにを言ひ。魔族？」

「あ、あのエクリア姉さま。これは、」

「エクリアとか言ったか、「

「名前でよ、ぶな魔族。」

「…………少し表でろや。」

「なぜ私が魔族の言いつことを聞かなければならぬ。」

「…………セリー・ヌがいるから外でやうつか？」

「ふむ、それもそうだな。」

そつ聞くと同時に、俺はベランダから飛び出した。

そのあとをHクリアが追つてくる。

俺は庭園の様なところに立ち止った。

「一つ聞きたい。あんたとセリー・ヌから、同じ呼ばれるよつの感覚
がする。なぜだ？」

「ふん、訳のわからぬことを。」

そう言ってHクリアは連接剣を振りかぶってきた。

「…………」

俺はそれを刀ではじく。

「イオ＝ルーン」

ちよつ！？純粹系魔術かい。

「くつ。」

避けよつとするが直撃。

「おひあーー！」

俺は、ハイシェラ様から習つた地脈系魔術で地割れをほなつた。が、回避される。

で、また連接剣を振り下ろしてくる。

「ちー」

はじいて瞬時に懷に入る。

「くへりえつーー！」

刀を水平にして切る。

「くつ」

が、避けられて掠つただけにとどまる。

「ならばーー！」

すかさず俺は、電撃系魔術で落雷を発動させる。

これは、直撃したよつだ。だが効いてないよつだ。

「イオ＝ルーン」

また、魔術を発動される。

それを回避したあと、すぐに念動系魔術で石つぶてほ発動させて応戦する。

(コイツ、強い!!)

俺が持てる全ての魔術と力を使つても、圧倒されている。

セリカさん程では無いにしても、十分強い。

魔術と連接剣の連撃が強い。俺に休ませる隙を許さない。

(このままじゃあ、いつかやられる。)

俺は、そう思った。

「ならば、」

「?」

俺はそつと、刀を鞘に収めた。

エクリアは困惑しているようだが、チャンスと思い連接剣を振り上げた。

俺は、左足を下げる腰を落とし、左手は鞘に、右手は柄を握る。それは抜刀の構え。

連接剣が振り下ろされた。

「ハアアアアアアアアアアアアアアツー！」

そして俺は刀を振り抜き、

ガキンッ！！

「なつー？」

連接剣を斬った。

エクリアの顔は驚愕に満ちていた。

が、それも一瞬。

「イオ＝ルーン」

俺の抜刀後の隙に魔術を使用してきた。

「グアツー！」

魔術は、隙だらけの俺にクリーンヒットした。

「ガハツ」

俺はその場に倒れてしまった。

「剣を斬るとはな、思いもしなかった。」

「だが、これで終わりだ。」

確かに。俺の体ボロボロだし、動く」とは言えない。

(あ～あ、俺はまた(・・)死ぬのか。)

まで、まだだと?何で俺はそんなこと考えた?

俺は一度、死んでいるのか?

『思い出せ』

何だ?

『呼べ』

誰を?

『取り戻せ』

何を?

『本当の自分を』

本当の……俺?

《「」の魂を》

ああ、そつか。俺は、本当の俺は転生者なのか……。

記憶喪失だなんてな。

ていうか、セリカと会ってるし。ましてや、エクリアとセリーヌにも会ってるし。

成る程、俺はフェニックスの血に惹かれてたんだな。

同じ血を持っているからか……

「つて、ヤバッ！！」

エクリアが俺の刀を振り下ろしてきました。

俺はそれを避ける。

「ほう、まだ動けたか。」

「ああ、なくし物を見つけたんで呆けてた。って言つた俺の刀返せー！」

「普通、敵に武器を『』えるか？」

「ああ、そうだな。別にいいか。」

「何？」

「来い、Lance of Eclipse（ランス オブ イクリプス）」

俺は、【魂】を喚びだした。

「何だと！？」

エクリアの顔は驚愕に満ちていた。

ま、当たり前だな。いきなり槍が現れるんだから。

「さて、『殺戮の魔女』よ。」

エクリアの顔がまた驚愕に満ちる。

「お前の力見せてもらひや。」

そして俺はエクリアに接近し、槍で突く。

「ぐつ！？」

エクリアは刀で防ぐが、すぐに俺が槍で突く。

「ぐつ！？」

太ももに軽く刺したあと、俺は一旦距離をとる。

「くっ、イオ＝ルーン」

エクリアはすぐさま魔術を発動する。

「なめるなつ！！」

俺は槍に魔力を纏わせイオ＝ルーンを相殺させる。

「なつ！？」

俺はエクリアに近づき、

「カツキーン、ホームラン！..」

槍の柄で腹を思いつきり叩いて、エクリアを吹っ飛ばした。

「グハッ！！

エクリアは、転がつていった。

魔力を纏つた槍で叩いたんだ。暫くは動けないだろう。

「殺すなら、早く殺せ。」

「いや、殺さねーよ？」

「何？情けをかける気か？」

「いや、殺したらセリーヌにフェミニンスの呪いが受け継がれるかもしれないし、それにセリーヌが悲しい思いをする。」

「お前、ほんとに魔族か？」

「わあな。」

そつぱいながら俺は、エクリアに治癒の水をぶっかけた。

「冷たつ……なこをする？」

「うぬせー。刀は返してもううべ。」

やつぱり俺は、刀を鞘にしました。

「わじと、えうじゆうか？」

俺たちは庭園の様なところ戦っていた。するとなんとこり」とでしょうか。兵士がわらわらと歩いてくるではありませんか。

「まづは、

そつぱりて俺は、空中ジャンプをしてセリーヌの部屋のベランダに跳んだ。マ○オも真っ青だ。

「つーージークさん、エクリア姉さまは？」

「大丈夫。下で倒れてるよ。一日中寝とけば元気になるよ。」

「いめんなさい。迷惑をかけてしまって。」

「うわうわ謝りたいよ。夜中に勝手に部屋にはいったしね。」

「それに、俺が魔族だし。」

「あの……それは……」

「姫神フュミリンスの呪い」

「つ……」

「仕方ないよ。血の呪いには勝てない。」

「何で知っているのですか?」

「同じだから、かな?」

「え?」

「さてと、俺はもういくね。あ、そうだ。」

「俺は【魂】で指輪を創った。

「これ、あげる。」

「え?あの……これって……」

「その指輪、呪いと病気を軽くする効果ついてるから。」

「え、あの……」

「じゃあね~」

俺はそつまつて、部屋から飛び出した。

* * * * *

うーん、濃い一年だった。

セリカに拾われ、セリーヌの部屋に忍び込み、エクリアと戦いをした。

「さてと、迷宮にいくか。母さんとこウイはちやんと逃げきったかね~?」

そう思いながら歩いていると、田の前の空間が歪みました。

「...」

なんだ?何が起こっている?

そして、そこから女の人が現れた。

大量の魔力、目を隠しているアイマスク、口を塞いでいるボールギヤグ、お付きのムキムキのおっさん(土合)、でかいスピーカー。

どこかひびく見ても、姫狩りダンジョンマイスターに出てくる漂着した異界の姫です。

知り合い達の中では、ミ姫と呼ばれていた最強のゴーリットにして我らがアイドル。

やべえ、欲しい。」の子が欲しいよ。

「ヴァアアアアアアア」

つて、アウエラの裁き！？

「ヤバッ」

ズドーンッ！

確か、姫狩りだと捕獲せずに倒せば良かつたんだよな。ならば、

「カツキーン、ホームラン」

エクリアに使った技、舗有無欄をはなつた。

そんでもって、クリーンヒット。そんで気絶。

よし契約するか。

「我がジーク・マーシルンの名の元に跪け。」

そんなこと言いながら、魔力を流して契約する。

適当にやつたけど、できたっぽい。

それにもしても、まあ一ヵ月ほどのおつか（十五日）せびつてこひ
んだろうか？

あれ？歪みの中に帰つていった。

つて、歪み大きくなつてね？

「ちよ、おま……」

そう言つて俺は歪みの中に消えた。

* *

「…の……い……で……か？」

ん、誰だ？

「あの……い……じょ……ですか？」

何だよ、聞こえねえよ。

「あの、大丈夫ですか？」

「んあ？」

俺が目を開けると、

「良かつた。無事で。」

「へ？」

小児こどもおーとまがいた。

なんで?

五話（後書き）

なんとなくHIMIKO登場
これから「HIMIKO育成計画」でもやるつかな?

感想お待ちしております。

六話（前書き）

オリキヤラ登場！！

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。」

「ビックリしましたよ。空から降つてくるなんて。」

「そうなのか。ところで君は？」

「あ、僕の名前はエミリオです。」

「そうか……、俺の名前はジークだ。驚かせてすまなかつたな。」

「いえいえ、それよりも体大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫だ。」

「でも、何で空から？」

「歩いていたら、気絶してきずいたらここで倒れてた。」

「そりなんですか。不思議ですね。」

「そうだな。不思議だな。」

「どうも、ジークだ。只今俺の田の前にまおーさまがいる。どいつも、ジークだ。只今俺の田の前にまおーさまがいる。

魔力は感じないから、まおーさまになる前のエミリオかな？

「おつーー！いいことかった。今からH//ツオを強くされば、まおーちゃんの苦労が無くなる。まおーちゃんは不憫すぎる。

よし、俺はH//ツオを強くする。

そのため、

「H//ツオーー..」

「はこつー..」

「お前の家に住ませてくれ。」

「へ？ 家に？」

「ああ、俺はこの国の者じゃないからな。だから、たのむっーーー！」

「いいですよ。」

「ホントかー？ ありがとー。」

「いえいえ、家に行く前に、仕事終わらせないと。」

「仕事へもしかして、この庭園はお前が作ったの？」

「ええ、やつです。」

「すうじな、こんなキレイな庭園初めて見たぞ。」

カルツシャ王国の庭園よつす”」。

「よこ、つしょ

HIIコオは重そうに土の入った袋を運んでいる。

「ほり、持つてやるよ。」

「あつ、ありがとうございます。」

「よつと、思ったより重いな。」

「僕、小さくて力も無いからいつも大変で。」

「なら、俺がお前を鍛えてやうつか?」

「え?鍛える?」

「そうだ。力をつけるだけじゃなく、戦い方も教えてやる。自分の身は、自分で護る。自分の身を護れない奴は、他の人を護れない。」

「えへと、じゃあお願ひします。」

「よし、明日から暇な時間にトレーニングするぞ。」

「はい。」

「よし、なら早く仕事を終わらせよう。……腹へった。」

「わかりました。」

そして、俺たちは仕事を始めた。

* * * * *

転移後・三年

「よし、今日は迷宮にいくか。」

「ええ……迷宮って魔王の？」

「ああ、そうだ。」

「ムリムリムリ、そんなところ行けないよ~」

「大丈夫。お前は強い！！」

そう、ヒミコオは強い。予想外の強さだ。

ヒミコオは手数で勝負していく。

その身軽な体で素早く近づき、両手に持つた双剣で斬つてくれる。

ヒミコオは、モンモンかー?と俺につつこませる程に乱舞してた。

しかも、俺は双剣は専門外なので、ヒミコオが自分で創った型でだ。

最近は、その手数で俺に食いついてきてる。

あと、魔術が使えるようになった。

俺が教えたから最初はできなかつたが、できるようになった。

しかし、ミニリオ自身の魔力の量が少ない。なので、あまり使わな
い。

まあ一さまになつたら魔力がわんさかもてるだらう。ちなみに電撃系魔術を使う。

「それに、魔王のところに行くだけだから。」

「そっか、なら安心した。…………つてするか~~~~~！」

おお、ハリッシュ

「何で魔王のところに行くなですか？」

されど 僕は半魔人だから探偵はても……と思つた

うん、挨拶は大切だよ。

「はあ～～～、わかりましたよ。断つても無理やつづれてくんでし
う？」

「当たり前だ。」

「少し待つてください。すぐに用意します。」

そうじつて、Hミリオは家に走つていった。

迷宮内では何が起こるかわからんないからな。

「来い。アイリス。」

そう言つと空間に歪みができ、中から漂着した異界の姫が出てきた。

しかし、アイマスクとボールギヤグが外れていた。

「はい、主。」

漂着した異界の姫は、俺と契約したせいか正気を取り戻し、言葉を話せるよつになつた。

名前を「アイリス」と名付けた。

「今から迷宮に入る。Hミリオを援護しろ。」

「了解しました。」

「お待たせしました。」

俺が命令していたら、Hミリオが装備を整えてやつてきた。

「うし、じゃあいくか。」

「はいーーー。」

そして、俺たちは迷宮へと入つていつた。

* * * * *

俺たちが迷宮に入つてからだいぶ経つた。時、

ズドーンシー！

「な、なにつ？」

「爆発のようだな。場所は……近いな。」

「どうします？」

「楽しそうだな。行くぞーー！」

「やつぱつそいつですか。はあ、そんなんだから、顔が恐いんですよ。

」

「HILLIオガ俺をこじめる~」

「よしそー、私はいつまでも主の味方ですからね。」

アイリスよ。君は最高だよ。

「逝くなならざわつわと逝つてくだれこ。」

「ちよ、HILLIオー？字が違つぞつーー。」

「𠂊のせこです。」

「それも違つよ！？何か俺に怨みでもあるの？」

「怨みなんてあるわけ無いじゃ無いですか。」

「H//リオ。お前……」

「あるのは侮辱です。」

「チクシヨー————ツ————！」

「どうしてだ！？どうしてお前はそんな風になってしまった？」

「これが、ジークさんの教育の賜物です」

「俺はそんな風に育てた覚えはないぞ！？」

「育ててほしくない人NO・1ですよ。」

「ひどくねー？」

「戦闘しか能がない人ですから。」

「ぐはっ！—！」

「主、そろそろ行つた方がいい気がしますが。」

「あ、ああ。そうだな。」

「そして俺たちは、爆発があつたであろう方向へと向かつた。」

* *

「なつ！…」これは！？

「すごいですね。」

そこには、魔族の遺体が大量にあつた。

「ヒドイな。」

ガキンッ！！

「何だ？」

「戦闘の様ですね。」

「行くぞ！！」

俺たちが走つていいくと、そこには少数の人間族と大量の魔族が戦つていた。

が、魔族の方が劣勢の様だ。

「あの人間たちは？」

「勇者の様ですね。姫様もいるみたいですし。」

確かにシルフィィーヌの姿もある。

これが勇者一行か。

正直言つて、弱いな。

勇者とH//リオでは、H//リオの方が強い。

勇者一行という集団で動くことによって、その弱さを補つている。

一行でやつとH//リオを倒せるんじゃないか？

そして大量の魔族が攻めてきているこの時に個人の力がわかる。

勇者は、自分の勇者としての能力に頼っている。

それに比べ、H//リオはこれといった能力もなく、魔術も使えるとは言えないため、自分で磨いた技量が頼りだ。

ましてや、相手が俺という絶望的な模擬戦をしてきたのだ。経験などこくらでも積める。

魔王とタイムマンを張れるだろう。勝てるかどうかは知らないが。

「H//リオ。お前は隠れてる。姫様に見られたらヤバいだろ？」

「わかりました。」

「では、行つてくる。」

「逝つてらつしゃい。」

おい、お前は……

まあ、いい。さてと、助けに行きますか。

と思つていろひちに、シルフィーヌの後りで、リザードモールが槍を振りかぶつた。

「ヤバッ、間に合え！！」

俺は、走つてシルフィーヌを片手で抱き抱えると。もう片方の手で【魂】をだして、槍を受け止める。

「えつー!?.」

「大丈夫かい？ 可愛いお嬢さん。」

「え…あ、はい、大丈夫です……//」

「さてと、可愛い娘に傷をつけようとした罰だ。」

そう言つと、俺はリザードモールを刺し、飛び上がって安全な場所へと下がつた。

「あ、あの…………ありがとうございました。」

「いいよ、気にしなくて。こんな可愛い娘を助けるなんて当たり前だよ。」

「可愛いだなんて……／／／

そういうしていのうちに、勇者一行は魔族を片付けてこちらに歩いてきた。

「大丈夫かい？ シルフィーヌ。」

「あ、勇者様。この方が助けてくれました。」

「なつ、魔族！？」

「え？」

「どうやらシルフィーヌは俺が魔族だと気づかなかつたらしい。」

「何で助けた？ 魔族のクセに。」

「人を助けて何が悪い？ お前は人助けはしないのか？ ゆ・う・しゃ・さ・ま。」

皮肉を込めて言う。

「俺は、何で魔族なの人に人間を助けるのか聞いているんだ。」

「人間だから、魔族だからという見方はやめた方がいいぞ。それに人間と闇夜の眷属が共に暮らす国を俺は知っている。」

勇者は何も言わない。何か考えている様だ。

「…こちらも忙しいんでね。お暇させていただくよ。じゃあね、お嬢さん。気をつけてね。」

そう言って俺は立ち去った。

* * * * *

シルフィーヌ side

さつきの人、格好良かつたなあ。

助けてくれたし、それに私のことを、か… 可愛いって言ってくれる
し／＼／

しかも、魔族だったのに入れと魔族を差別しないし。

格好良かつたな

そういうえば、名前を聞いていなかつた。

なんて言つんだろう？

また会えたらしいな。

side end

* * * * *

「いやあ、スネーク。大佐、目標への潜入に成功した。」

「何やつてるんですか?とうとう頭が逝っちゃいました?」

俺たちは今、魔王がいる階にきていた。

あまり魔族と会わないよう移動していた。気分はMGS。C・Q・Cが使えたらな~

「これは、潜入ミッションだ。余分な戦いは極力避けるんだ。」

「メンドクサイ。敵なんて全て蹴散らせばいいんですよ。それに、戦いなくして何が楽しいんですか?」

ヤバイ。Hミリオが戦闘狂になってしまった。

そして俺たちは、テカイ扉の前にきていた。

ギィィィィ

「邪魔するで~」

「邪魔するなら帰つてや~。」

「あいそ~」

つて、魔王よ。なぜ吉本のネタを知っている?お前も転生者か?

「冗談はここまでにして、はじめまして魔王よ。」

「何者だ？」

「ジークだ。そして、これが奴隸のヒミリオとアイリスだ。」

「誰が奴隸だ。誰が嬉しがる？」

「あそこだ。」

「私は主、ジーク様の肉○隸で幸せです。／／／」

「で、何のようだ？半魔人と人間」ときが。」

「コイツ、俺が半魔人だと見抜いたのか。」

「一つ、忠告をと思つて。」

「忠告だと？」

「ああ。今、勇者がこちらにきてくる。」

「ああ、知っている。そのために、軍を出している。」

「ええ、アナタの軍は強いです。それにアナタも。」

「そつ、魔王は強い。ヒミリオはタイムン張れる、と思っていたが会つてみると強い。」

俺に本気を出させることができる、少数の一人だろう。

「しかし、相手は一人ではない。それに、勇者の能力とあなたは性格が悪い。」

「それで？」

「アナタは、このままでは消されてしまう。」

「ほら、この私が負けると？」

「そこで、提案だ。アナタがもし負けたら、復活するとでも適当なことを言え。そうすればこの国はアナタを封印するだろう。封印させれる最適な姫がいるしな。」

「封印されたら意味がないだろ？』

「封印された後、使い魔にでも命令させて新しい体を手に入れる。そして元の体に戻ればいい。まあ、人間に負けたらな。」

「ふむ、人間に負けるようなことはないと思うが、忠告感謝する。」

「俺は、アナタに消えてほしくないだけだ。では、これで。」

「ああ、さらばだ盟友よ。」

「半魔人ごときが盟友か？」

「フハハハハハハハハ、半魔人ごとき（・・・）だと？貴様、強いだろう。」

魔王が笑ってきた。

「すごいな。力を押さえていたはずだが?」

「かすかだが、魔力が洩れていだ。」

「その魔力を感じることができることがすごいな。ふむ、そうだな。
じゃあな、盟友。」

「ああ、またいつか。」

そして俺たちは、迷宮を後にした。

* * * * *

魔王が封印された。

原作通りにシルフィーヌが封印したらしい。

そして、俺たちは迷宮を探索してたら、何かの人工的な部屋の様な場所を見つけた。

そして俺たちは、そこを調べることにした。

「スゴく神秘的な場所ですね。」

「神殿では無いよつだが、何かの儀式をする場所か?」

「何か、魔術的な物も感じます。」

「確かに、これは……封印？」この部屋全体にかかっているな。」

そして、俺たちは開けた場所にでた。

「ほう、こんな所に来るとは何の用だ？」

「うーー。」

声の方を向くと、男がいた。

黒い髪に、伸びた顎鬚、騎士の様な鎧を着ており、ボロボロだが豪華なマントを羽織つており、目は白目の部分が毒されたように紫色に染まり、黒目は紅く輝いていた。左目の下から首まで刺青の様に文字が描かれていた。すごい量の魔力を有しているらしく、包み隠さず堂々としていた。

何より目を引いたのは、左側の額のみから伸びた角だった。

そしてその男は、威圧感を発していた。それはまさしく『王』といったかんじだった。

「お前は一体、何者だ？」

「我か？ 我の名はヴァーナードだ。見ての通りしがないただの騎士だ。」

「

ジークが12歳現在の強さを比べると、

ジーク セリカ>エクリア>魔王>>>エミコオ>アイリス>>
勇者>>>リウイ

てな感じですね。ジークが本気だしたらですけどね。ちなみに、セリカとエクリアはガイ・ボルグの因果の逆転は効きません。俺的に
ですけどね。

新キャラのヴェナードは強いです。そして、あのキャラとそんな関係があつた！？ てな感じです。

この2月一杯は更新できるか分かりません。ご了承ください。

感想お待ちしております。

六話（前書き）

遅くなつてすみません。

戦女神シリーズをやり直そうと思つてやつたはいいが、ぜんぜん進まない。orz

神採りの体験版やつたり、近くのゲーセンで「〇〇」を見つけたのでやり始めたり。
忙しい……

「しない騎士? そんな威圧感を放つておいて何を言ひ? アンタが
しない騎士ならば、他の奴らはクズだな。」

「ハハハハハハハハ、ならば我は何だとこいつのだ?」

「騎士王」

俺は即答した。

「ふ、騎士王か…… 我は王の器ではない。」

ヴィルナードは自嘲氣味に応えてきた。

「わひと、なぜお前はこの部屋にいる? この部屋は一体何だ?」

「この部屋は封印の間だ。この部屋中に封印がかけられている。そ
して我はここに封印されてこるとこいつわけだ」

「これが封印? こんなんじや力を封じることもできないぞ。体がダ
ルくなるぐりー?」

「仕方あるまい。魔術師が雑魚どもしかいなつかたのでな。」

「じゃあ、なぜお前はこんな所にいる? こんな所はすぐに出てけば
いいのに。」

「我なりのケジメでな。」

「そうか。それと……アンタは魔族か？」

そう、ヴェナードは魔族の感覚がしない。いや、確かににするにはする。だが何かおかしい。人間の感覚もある。だが、半魔人でもない。

「さあな。この身はまだ（・・）人間なのか、魔族なのか、それとも別の何かか。我もわからん。」

「まだ？ということはお前は人間だったのか？」

「ああ、人間だった。」

「じゃあ、どうしてそんな姿に？」

「知りたければ我と戦え！！貴様が勝つたら教えてやる！」

……は？

「いやいや、なぜに？」

「（）では一人つきりでな、娯楽が無いのでつまらないのだよ。」

「だからってなぜ戦う？」

「貴様が強そうだからな。楽しめるだろ？。」

ええ～、コイツ戦闘狂かよ！～

「では、ゆくぞ！～」

「ちよ、まひーー。」

俺は、瞬時に槍を具現化させヴェナードの両手剣の斬撃を防いだ。

「おいーーあぶねえなーー。」

「本氣でここーー。」

「人の話を聞けーー。」

ヴェナードは、上段斬りをしてくる。俺は冷静にそれを逸らす様に防ぎ突くが、ヴェナードは避けて横斬りをしてくる。それを同じ様に逸らし、なきはりう。ヴェナードはそれを両手剣の腹で受け止める。

「やはり強いな。」

「アンタもなーー。」

「ふむ、ならば少し本気を出すか。」

ヴェナードはそう言つと斬りかかってきた。オレはそれを避けて突くが、

「ツーー。」

ヴェナードは突きを剣で弾き、無防備になつたオレに横斬りをする。

「クソッーー。」

オレは咄嗟に後ろに下がつて避ける。すぐさまオレは、突くが避けられる。

そしてすぐに反撃される

オレはそれを避けて反撃する。

避けでは反撃を何回もくじ返していく。

それを何回かくり返した後オレは離れて、姿勢を低くして突っ込む。

そして槍の先で切り上げる。

が、それも防がれる。

それでもオレは一回、一回と諦めずに突く。

が、やはり避けられる。

「これで終わりにしてやう。我が奥義の一つを喰らつがいい……」

そう言いかづかナードは剣を前に突き出すよつに構え、

突っ込んできたかと思えば斬りつけてきた。

「フンッ……」

普通の斬撃なら避けただろう。普通（・・）なら。

「なつー!?

七つの斬撃が同時に繰り出された。全くの同時に。それをオレは捌くが、七つの斬撃を同時に相手することができず。左腕に三つの斬撃を喰らってしまった。

確かに今、剣が七本あつた。これは

「多重次元屈折現象（キシュアゼルレッチ）」

多重次元屈折現象、型月の世界で出てくる現象で、別の平行世界から自分の世界に物を呼び出す現象だ。

キシュア・ゼルレッチやアサシンが使つてた。

「本氣だつたのだがな。やはり強いな。」

「そりやどうも。」

左腕は幸いにも傷が浅い。戦闘に支障なさそうだ。

「少し本氣を出すと言つたな。」

「ああ。言つたな。」

「全力で来いよ。相手してやる。」

「ほひ、ならば全力でいいつか。」

ヴェナードの威圧感が何倍にも跳ね上がった。

「我が最強の一撃つけてみよ……」

セツヒト、ナードは剣を上に構え、

「覗せられし騎士の剣」
バニッシャー

勢いよく振り下ろすと同時に剣から赤黒い光の斬撃が放たれた。

「つー！君臨すべし神々の涙」
レイニングティアーズ

半透明の水色の膜がオレを包む。これは傷を治し、バリアにもなる優れものだ。

しかし、バリア自体はそこまで頑丈じゃない。ランクがDの魔術以上を使われると威力は半減するだけ、いつも簡単に貫通する。

なぜ使つたつて？これの優れた所は回復だ。

魔術を発動中に攻撃を受けても体の一部でも残つていれば必ず再生する。使用制限がないので魔力が続く限り連発できる。貫通されたら新しいのを発動しなければいけないけどな。

ヴェナードのパーティーシャーが案の定レイニングティアーズを突き破りオレの体を吹き飛ばす。

が、すぐに再生する。

そしてオレはパーティーシャーの爆風を利用して、ヴェナードに一気に

近づき、槍を前におしつけた。

「オレの勝ちだな。」

「………… そうだな」

いよいよオレとヴァナードの闘いは終わった。

前回のあとがきの強さが全く違いました。
家でメモったのを間違えてボツのを投稿しました。

正確には十五歳現在で魔術＆宝具無しで

セリカ　ガーナード　ジーク　エクリア　魔王　ミコオ　ア
イリス　勇者　リウイ

てな感じです。

あと、姫狩りは戦女神2の一年前との指摘がありました。
ガイドブックを買つたら確かにそうでした。
すみませんでした。

つてことでタイムスリップといつことでお願いします。

八話（前書き）

戦女神2が終わらない。やつと五章までいった。久しぶりだから全然おぼえてねえ。

ラテンニールはオレの嫁。
他は全部くれてやる！！

「それで、お前は人間か、魔族なのか？」

オレは早速、疑問を聞いた。

パチンツ

「話をしよう。あれは今から36万……いや、1万4000年前
だつたか……まあいい、私にとつてはつい昨日の出来事だが、君
たちにとつては多分、明日の出来事だ。彼には72通りの名前があ
るから、なんて呼べばいいのか？確かに最初に会った時は、Enoc
h。そう、あいつは最初から言つことを聞かなかつた。私の言つと
おりにしていればな……。まあ、良い奴だったよ。」

「Enoch。そんな装備で大丈夫か？」

「大丈夫だ。問題ない。」

「神は言つている。ここに死ぬ定めではないと。」

「Enoch。そんな装備で大丈夫か？」

「一番良いのを頼む。」

「神は言つている。すべてを救えと。」

「やあ、私のサポートが心配なのかい？良いんじやないかな？あい
つも良くやつてくれるしね。いや、君の頼みは断れないよ。神は

絶対だからね。」「

「Enoch。人が持つ唯一絶対の力。それは自らの意志で進むべき道を選択する事だ。お前は常に人にとつて最良の未来を想い、自由に選択していけ。さあ、行こう。」

「ああEnoch。私の可愛い子供たちが悲しんでいる。行きなさいあなた達、弟の敵をとるのです。」

Pirriririri Pi

「ああ、今回もだめだったよ。あいつは話を聞かないからな。そうだな、次はこれを見ている奴にも付き合つてもいいよ。」

「…とまあそんな感じドウベーラバア。」

「解るか!!」

「いきなり殴るとほ、ヒドい。それに早くツッ「まないと、セリフの間に描写が無いくせに長いから読者が飽きたるだ。」

「メタ発言すんな!!」

オレの右手がヴェナードの顔を頬をえぐつた。

「くつ、一度もぶつた。母さんにはぶたれたことはあるけど、オヤジにもぶたれたこと無いのにぶつたね!!」

「死ネHHHHH!!」

アツパーで腹を殴り、蹴り上げる。そして、サマーソルトからの踵

落とし。

「グハッ。くつ、我がやられても第一、第三の我が……」

「約束されたツツ 「//の剣」^{エクスカリバー}

「わやああああああああああああああああ……」

「しばらぐお待ちくださいこ～

「で、お前は何なんだ？」

「我はな、憑依者なのだ。」

「憑依者？転生者じゃなくて？」

「やつ聞くとまるで転生者の様だな。」

「そうだ、オレは転生者だ。」

「そつか、だが我は憑依者なのだよ。」

「ふうん。」

「憑依者とは、神によつて元の世界から平行世界の自分へと乗り移る」とだ。」

「特典とかは？」

「無い。有るとしたら多重次元屈折現象を引き起こせることと、前の世界の記憶を忘れないことだな。」

「ほ～。で、いつから」の世界にいるんだ？」

「486年前だ。」

「ながつー…？」

「まだ、ゼイドラム王国が名前もない小さな国だった頃に憑依してな、一応これでも王家の者に憑依したのだ。」

「それで、ファンタジーな世界だと小さな頃に浮かれてな、剣を学んだよ。そしていつしか騎士王と呼ばれていたよ。國の中で最強とも言われてた。」

「その頃だった、神殺しのことを見たのは。」

「」の世界がデイル＝リフィーナと知ったとき私は思つた。こんな力じゃあ、すぐ死ぬと、な。」

「だから私は力を求めた。そして会つたのが我と同じで力を求める魔術師だった。」

「そして、そいつと共に辿り着いたのが魔人化だった。」

「じゃあ、その姿は……。」

「そり、魔人化したのがこの姿だ。」

「だが、国は我を恐れた。魔族だからというだけで国から縁を切られて、ここに封印されたというわけだ。」

「ふうん。後悔はしているのか？」

「してはいるな。毎日ここにこもつまらんしな。」

「ならば、オレとともに来ないか？どうせなら原作介入した方が楽しいだろ？」

「ふ、確かに。」

「なら来い。」

「分かった。お前にについて行こう。」

「よし、なら自己紹介だな。オレの名前はジーク・マーシルン。リュイの兄で過去からタイムスリップしたらしい。」

「過去から？」

「ああ、まだ原作も始まってないしな。」

「次は我か……、我ヴァナード・ヴァルヘルニアの名にかけて、我が主君ジーク・マーシルンに仕えよう。」

「は？ 主君？」

「そうだ、我是貴殿を主君とした認めた。」

「まあいい、これから頼むぜ。相棒。」

「…ちりこそ頼む。相棒よ。」

* * * * *

封印の間からでた後、地上に戻ることにした。

その途中で

「……あれは？」

金髪の幼い睡魔がいた。

「あれほおわか……」

ああ、間違しない。リリイた。

魔王復活力

たたかひに、トヨタの車が走る音だ。

「どうせ僕なんか役に立たないんだ。いつだってそう。あの時だつ

うん、死にそうな勢いだ。

「じゃあ、どうなるんだ？」

「ああ、とりあえず後を追おつ。」

そして、迷宮から出て原作通りこ、

口ヶツ

「 あつー?」

バローン キラン //

「 こべやー!」

「 ト解

行ってみると

「 まおーあお、まおーあおあー。」

泣きそうなコロイド、

(つ) () () () () () () ()

ゴシゴシ

(。) () () () () () () ()

。

(。) () () () () () () ()

。

「へーこつた、何が起つた?」

「ああ、よかつた……気がついたあ……

「身体……私の新しい身体かっ！」

「よくやった。一時はどうなる」とかと思つたが、なかなかやるじやないか。」

「…………えっと……あ、ありがとうございます。で、でも……実は、その……あの……」

「どひした？ もひと喜ぶがいい」

「お前の働きで、私は人間ビモに復讐することが出来る。本来の居場所に戻ることが出来るのだ」

「…………お、怒らない？」

「しつこ。それ以上囁つなら本當に……」

「…………」

「あひあひ……」

「…………」「これは……どひこつ、ことだ？」

「ば、馬鹿な……」「人の人間……か、小さいのか？いや、それ以前にこの胸はなんだ？」

「そして、この惡々しい魔力は……」

「一クラッシュド王国第三王女シルフィーヌがいた。

((なえだや~.))

八話（後書き）

まさかの汁姫 + 魔王。

すんません。調子にのりました。

あと、前回のあとがきで、2年前とかいたが、3年前です。すんません。

うん、死ぬべきだよねオレ。ちょっとビランダへ行つてきます。

オレの家ビランダねえじゃん！（。）

九話（前書き）

遅くなつてしまつてすみません。

そして、神採りアルケミーマイスター発売おめでとうござりますーー！

「なんと言つことだ……人間に……ましてや、憎き姫の身体を乗つ取るとは……」

「「めんなさい」、「めんなさい」。」

「どうしてくれる……これでは復讐もまともにできなこべ。」

「お取り込み中悪いんだが。」

「ん？ お前はあの時の……久しいな。」

「ああ、久しふりだな。そして……あの……何といつが……ドンマイ。」

「そうだ。」この身体、私を封印した忌々しい姫の身体なんだよ。」

オレが魔汁（魔王+シルフィース）？を慰めていると、

「思つたのだが、好都合ではないのか？」

ヴァーナードがそう言つた。

「なぜだ！？ この身体は魔力こそあれど、病弱で運動もまともにできない身体なのぞ！……」

「だが、封印した姫となれば封印を解く」ともできるはず。それに、封印を強化するときに近くに行けるから、それがチャンスだ。」

「ほかの奴にバレるのでな？」

「そこで、魔王！」をするのだよ。」

「魔王！」？』

「そうだ、このHミリオを魔王としてでつち上げる。そうすれば攬乱できれば隙はできる。その内に封印を解けるだろ。魔力を封じ込めておけば誰も自分たちの姫が魔王とは思えまい。」

「さすがだ！…、ヴェナード！…。」

「ふむ、確かにそうだな。」

「つてまで。僕が魔王役かよ…？」

「なに、魔王役をすれば強い奴らと戦えるのだぞ？」

「……ジユルリ」

こんな短時間でHミリオを手玉に取るとは、ヴェナード恐ろしい子

！！

「ところで、そこの奴は何だ？」

今更？

「我はヴェナード。ジークの相棒であり、騎士だ。」

「ふむ、強いな。戦つてみたいものだが、私が負けるだらうな。」

力を見極めているな！実は魔王つて強いんじゃね？

「姫様？姫様？」

「ヤバい。じゃあな魔王。こいつはもうつてくぜ。」

「キヤアアア～」

俺は、リリイをつれて逃げ出した。

* * * * *

「さて、それでは第一回魔王軍会議」

「わ、パチパチパチ」

.....」

ヴェナードしかのつてくれない！？

「まずは自己紹介からだな。オレはジーク・マーシルンだ。」

「ヴェナード・ヴァルヘルニアだ。」

「エミリオ。」

「ええっと、その……名前は無いです。」

「なら、お前の名はリリイだ。」

「リリィ…………うふ、ありがとーーー。」

「それでは、H//コオを魔王としてでっち上げる。ってことでH//リオ。ここから先はお前の腕の見せ所だ。頑張れよ。」

「ああ、任せろ。」

「ひして俺たち魔王軍は、出来上がった。
クルセイダース

おまけ

「ウーナード、お前は間違つていい。」

「いや、ジークお前こそが間違つていい。」

「なんだと?」

「我が軍はやはり睡魔族を集めるべきだ。」

「ぬかせ、ここはやはり飛天魔族だろ?が!—!」

「ふざけるな!—!」

「……普通に両方とも集めるって考えれないのか?」

「あ、あ」

「よろしく、ならば戦争だ……」

「いいぜ、どっちが正しいか決めよつ。」

「死ねえええ！！」

その日の夜、ヨークリッド王国は未曾有の地震が起つた。その……。

九話（後書き）

ジ「ジーク・マーシルンだ」

ヴュ「ヴュナードだ」

作「wasterです。いつも読んでくれてありがとうございます。」

ジ「さて、作者。何で遅れたんだ？」

作「戦女神シリーズをやつっていました。一応zeroの一章までいきました。」

ジ「なんでそんなに時間がかかるんだ？一度やったことあるだろ？」

作「セーブが消えていて……幻燐はヘタレでやつてました。」

ヴュ「だからお前はヘタレっていわれるのだ。」

作「言われたことないし……」

ジ「どうして言われたことがあるけどな。」

作「うう……ど、どうじやないもん。」

ヴュ「じゃあ、なんて言われたんだ？」

作「い、一般的のMよりMだが、ドMよりMじゃないよなって。」

ジ「意味分からん。」

ヴュ「ここからは作者の自己紹介だ」

作「好きなものはゲーム、趣味はゲーム。運動は苦手で、吹奏楽部のくせにリズムが取れない。進学校に進んだものの、赤点ばかり。ちなみに、トランペットを吹いています。」

ジ「ダメ人間だな。」

作「それでは皆さん、この次もよろしくお願いします。感想もよろしく！」

ジ・ヴュ「「逃げたな」」

十話（前書き）

お久しぶりです！！

とりあえず言い訳、執筆自体は前からやっていたのですが、人生つて本当にやなことが多いな」と死にかけていました。本当に申し訳ない。

そこには白い空間だった。

安樂の椅子がポツンと置いてあるだけ。

ただそれだけ。

それだけなのになぜか安心する。

なぜだらうか？

まるで母親に護られるように、抱かれているような。

ふと気配がして後ろを振り向く。

さつきまで何もなかつたはずの空間にもう一つ椅子があり、そこに
独りの青年が座っていた。

やあ、久しぶりだね。

そう声が聞こえる。

何年振りかな？まあ君は覚えてないだらうがね。

オレも喋らうとするが喋れない。

全く君が羨ましそよ。自由でどこまでも行ける。まるで鳥のよつ

オレはその声をじっと聞く。

僕は翼をとられた上にか、の中に閉じ込められているようなものだしね。

聞く。

この数年ずっと独りぼっちだったからね。どうしても年の割に寄りのよつに寄つてしまつよ。ああ、退屈はしなかつたよ。君の人生（映画）を見せてもらつたからね。

聞いてしまつ。

僕自身は役者になれると思つてたよ。だけど監督はそのままつはなかつたらしい。

聞き入つてしまつ。

詐欺みたいな物だよ。この映画の主役だと思つていたら、視聴者だったらしい。役者にもしてもらえない。

そこで田の前が暗転する。

おや、どうやら今までみたいだ。ほら、役者は舞台に戻った方がいいよ。楽屋につつまでもいたら映画は始まらないよ？

声だけ頭に響く。

じゃあね。次はいつ会えるかな？楽しみだよ。君もそう思わないかい？ジーク・マーシルン

* * * * *

「……………変な夢だな。」

オレは目覚めたと同時にやつづぶやいた。

「映画？役者？監督？なんだよそれ。」

「まつたぐ、それ以前にアイツは誰なんだよ？」

まず、あの青年はオレを知っていた。そして、オレはアイツのこと

を忘れてるって言つていた。

「まあ、所詮は夢だ。」

そう言つてオレはベッドから起き上がった。

* * * * *

「【魂】ってなんなんだ？」

「へ？」

ヴォナードがいきなりそんなこと聞いてきた。

「うーん……簡単に言えば分霊箱みたいなものかな？」

「分霊箱…………つてあのハリポタの？」

「ああ、少し違うが似たような物だ。魂を分割して創るしな。違うところは器を用意しなくていいといふと、人を殺さなくていいところだな」

「分霊箱つて」とは、今こゝでお前を殺しても……」

「ああ、完全には死なないよ。ただ、魂だけになつて、数時間経てば【魂】に回収されるよ」

「それで身体が修復するのを待つ……と」

「いや、身体は直らないぞ」

「は？」

「だから、身体は修復しないって」

「え? ジャあ、どうするんだ?」

「奪つんだよ」

「はい？」

「身体を奪つんだよ。身体は直らないし、神核みたいにゆつくりと復活するつていう訳でもないし」

「マジか」

「マジだマジ。まじく、まじから、まじく、まじかり、まじ、まじ
き、マジカル、まじけれ、」

「なぜに打消推量？あと、頭脳パワーーー！が混じってた気がするが
……」

「気のせいだ。まあ、身体奪うのめんどいし、失敗したらこっちが
消されるから、君臨すべし神々の涙レイニンクティアーズを作つくつたんだ。【魂】があれば、
どんなに身体が消失しようが髪の毛一本で復活できるしな

「ちなみに【魂】は何個あるんだ？」

「今、現界してるのは一個だな」

「少ないな」

「セリーヌに渡した指輪だから、壊れることはないだろう。能力付
加したし」

「能力？」

「ああ、能力付加っていうは文字そのまま。オレの能力を付加して、

持ち主に効果を『えるんだ』

「で？どんな能力なんだ？」

「オレの能力は、必中、解毒・解呪、身体強化、神の加護（笑）だ。その中で解毒・解呪と身体強化を付加してある。これで病気はましになるだろ？』

「神の加護（笑）とは？」

「二ート神の、二ート神による、二ート神の為の能力。主にトラブル（原作）に巻き込まれやすい程度の能力」

「そんな能力つて……」

「おい、二人とも来てくれー！」

トミツオがなんか呼んでるな、仕事か

仕事つきくと労働CALLINGを歌いたくなるのはオレだけじゃないはず。

* * * * *

「と言つ」と、あそここいつの蛇を倒してくれ

「こきなりだな、おい」

エミリオに連れられて迷宮に入り、連れてこられた階、戦闘中のようだ。

「乗り込んでいつたはいいものの面倒なガキがいてな、その相手をしてたら、見事にヒドい状態になつたんだ」

ああ～、ブリジットか。エミリオ リリイ シルフィーヌ（魔王）で繋がつてゐるから、魔王だと勘違ひしてゐるんだよな～。いつも違うと言つても、その魔力は忘れないってね。

え？ ビリビリの風に繋がつてゐるのかつて？ それは知らん。

それにしても軍はエミリオ以外に指示出せるやつはないのか……

…問題だな。

まあ、いい。今はサーペントを倒すのみだ。

「じぐぞー……ヴォナード……」

「ああ……」

そう言つてからオレ達は走り出した。

身体強化を使い一気にトップスピードになる。

ヴォナードがとんずらとか言つてたが、気にしない。気にしたらいけない。

そして、一気にサーペントと魔王軍が戦つているとひりへ割り込む。

「もうついたのかー。」

「はやーー。」

「きたー。盾きたー。」

「メイン盾きたー。」

「これで勝つるー。」

えー!? もしかしてオレっていらない? ナイトがいれば十分ですか?

あとお前らヴァナ行けよ…。

オマケ

「つひ」とガンバレ

「は?」

いきなり田の前に一ート神が現れた。

「もう一度言つてください」

「聖杯戦争に行つてきて」

「…………なぜここ?」

「私の娛樂」

みんなは知らないだろ？が、ニート神はこいついう奴なんだ

「まあ、いいけど」

「あ、イレギュラーね」

「…………マスターは？」

「勿論、正義の味方」

「やるならさつをとして下せ」

実際は早く行きたいだけなのだが

「その前に、これ」

紙が目の前に現れる

「なにこれ？」

「サーヴァント表」
「おいい！？」

「大丈夫。名前と宝具しか載っていないから

「それでも十分反則だよな」

と言しながらもペラッとみるオレ

セイバー

真名：アルトリア・ペンドラゴン

宝具：「インビシブル・エア風王結界」、「カリバー勝利すべき黄金の剣」、

「アヴァロン約束された勝利の剣」、「エクスカリバー全て遠き理想郷」

ふむ。変わらんな。

アーチャー

真名：エミヤ

宝具：「アンコニアティックドフレイドワークス無限の剣製」

アーチャーは抜いちやいけないよな。

ランサー

真名：クー・フーリン宝具「ブレードフォート・アンドロメダ刺し穿つ死棘の槍」

オリジナルか……どっちが強いか楽しみだな。

ライダー

真名：メドウーサ

宝具：「ベルレフォーン他者封印・鮮血神殿」、「ブレーカー・ゴルゴーン自己封印・暗黒神殿」、「ゲイ・ボルク騎英の手綱」

サクラのサーヴァントはメドウーサじゃないと

アサシン

真名：七夜志貴

宝具：直死の魔眼

パロール

厨「キタ――」いやいややわわわわわわわわわわわわわわわわわ

キャスター

真名・高町なのは
宝具・不屈の心レイジングダーチャイトブレイカー、SLB

え！？魔王だと？うん。なんとか勝てるやーー。
多分、きっと、Maybe

バーサーカー

真名・鬼巫女（博麗靈巫）

宝具・賽銭箱（おさいせへん）、あらゆる干渉を否定し我を通す程度の能力（かてるわけねーだろ）、七夜

え！？鬼

巫女？え？あれ？何で宝具に七夜いるの？アサシンにいたじやん。え？でも……あるえ？鬼巫女って、あの鬼巫女？でも、うん、おかしいよね？とりあえずは

「用事を思い出したので帰らせていただきます」

「この世界では向こうの世界の時間は止まってるから大丈夫」

(.....)

(ハハハハハハ)

(.....)

(ハハハハハハ)

(.....)

(ハハハハハハ)

「 やああああああ 」

「 ニ・ザ 」

やつらつと同時にオレの真下に穴が現れる。

「 こやああああああ 」

そしてオレは穴を落としてしまった。

「 聞ねう、貴方が私のマスターか? 」

「え?」

そこには、金髪の少女と赤銅色の髪の少年がいた。

今更ですが方言が混じっていたらスミマセン

つてことで復活……皆さんお待たせしました。

そして正直に言おう……幻燐？ 以降が思い浮かばない……つてことでとりあえず幻燐？ まで行きたいと思います。途中からキャラがいるだけで、全然幻燐戦争と違うになるかもしだせませんが、大目に見てください。一応、幻燐戦争どつりに進める予定ですので。

最近FF14にハマっているんだ。ただ、友達居ないからソロだけど。…………グスッ

つてことでFF14友達募集中！！

Gysahneでやつております。主にラノシアで深夜べらりにてWaster Salvadorを見かけたらビビッド声をおかけください。

今はとある理由でPCディスプレイがないからやれないうけど

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5768q/>

幻燐の姫将g.....いいえ、槍兵です。

2011年7月4日08時53分発行